

3 研究のまとめ

(1) 成果

○ 教科横断的な学習の有効性

教科横断的な学習という手立ては有効であったといえます。2研究の実際(4)考察イの図1で示したとおり、96%の生徒が教科横断的な学習を行ったことで漢文の語順についての理解が深まったと回答しています。また、考察イの図2あるように、アンケートの1項目として出題した確認問題においても79%という高い正答率を示しました。ワークシートの記述の変容を対話の前後で比較した考察アの資料2、資料3、資料4、資料5を見ると、正しく深い理解へと変容していることが分かります。

○ 関心・意欲の面について

知識・理解の面だけでなく関心・意欲の面においても教科横断的な学習は効果がありました。考察イの図5、図6を見ると、英語を取り入れた語順の比較という教科横断的な学習が高い関心を引き出したことが分かります。

○ 教科横断的な学習の試行

教科横断的な学習を実践できたこと自体が成果であるといえます。次期学習指導要領で求められている教科横断的な学習を試行するという第一の目標は達成できました。学習内容は漢文の語順という基本的な内容であり、用いた英語教材もコミュニケーション英語Ⅱの教科書からの引用です。教科横断的な学習を行ってみようという県内の先生方にとって試しやすい内容を提示できたのではないかと思います。

今回、授業準備の段階で英語担当者から授業で使用した学習プリントを提供していただきました。全てを1人で準備するのではなく、他教科の担当者と情報や教材を共有しながら準備を進めることで、準備時間の短縮はもちろん新たな教科指導上の発見が期待できます。

(2) 課題

○ 準備時間

通常の漢文の授業よりも準備に時間が掛かってしまう点は否めません。教師自身が教科横断的な視点での準備をする必要があります。上記の成果で述べたように、他教科の担当者と教材や情報の共有をすべきではありますが、それでも時間は掛かってしまうでしょう。

○ 具体的な連携方法

実践例が少なく、国語科以外のどの教科とどのように結び付けるかが難しいところです。身に付けさせたい学力は何かという原点を忘れないことが重要ですが、具体的に他教科とどのように結び付けるかについては、今後、実践例を積み上げていく必要があると考えます。

○ 体系的な位置付け

教科横断的な学習にどれだけ広がりや体系をもたせることができるかという課題は残りました。今回は試行でしたが、実際に高校で実施するとなれば、どのようにシラバスの中に位置付けるのが問題となります。年に何回実施するか、どの領域、指導事項を選択するか等、具体的に設定する必要があります。

○ 目的の重視

手立てだけでなく、身に付けさせたい学力が身に付いたかどうかを向けることが重要です。教科横断的な学習が物珍しいからといって、その手立てを取り入れることに満足してしまうと、活動あって学びなしとなりかねません。目的と手段が本末転倒とならないよう注意が必要です。興味を引く活動だからこそ、身に付けさせたい学力の向上に貢献しているかどうかを常に意識すべきです。